

柳田国男・その詩の別れ

益田, 勝実 / MASUDA, Katsumi

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

33

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

14

(発行年 / Year)

1985-11-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019441>

柳田国男・その詩の別れ

新体詩人松岡国男に対する自己忌避

きょうのために仮に掲げておりました、「柳田国男と詩」というタイトルを、いま、「柳田国男・その詩の別れ」と改めて、お話しさせていただきます。

若き日の詩人が、やがて詩作を捨てて小説の道へと転じたということは、島崎藤村や田山花袋など、近い頃へきて、中野重治や伊藤整・井上靖等々、その例に事欠きませんが、松岡国男という新体詩人の△詩の別れ▽（中野重治式にいうと、△歌のわかれ▽ですが、柳田国男の場合、和歌と新体詩とでは、あとで申しますように接しかたが違いますので、こういうふうにいたします。）は、詩から小説へ、という転じかたでなかったことと、その詩と袂別する際の主体内部の葛藤のありかたに、注目すべきものがあるように思っています。

そして、それとともに、日本民俗学の開拓始祖となった、その松岡国男の柳田国男は、最晩年に、新体詩人としての若き日の自己の

益田 勝実

創作を無価値なものとして忌避し、『定本柳田国男集』から排除するということを敢えてしました。新体詩の作品を自分から切り捨てようとした。二度の詩との別れ——これは非常に珍しい自己抹殺の企てともいえましょう。

また、日本民俗学を育て上げたもうひとつの大きな力として、折口信夫は、師の柳田国男と常に並べて論じられる学者ですが、同時に歌人釈道空でもありました。折口の短歌創作は終生つづいていますが、特に注目されるのは、後半生の戦中・戦後の詩に打ち込んだ時期の存在です。養子折口春洋の硫黄島での戦死や日本の敗北にぶつかり、三十一音の短歌形態に封じ込めえない激しい思いを、独特のかたちの詩で、つぎつぎに歌い上げました。『古代感愛集』（一九四五）や『近代悲傷集』（一九五二）や、没後にまとめられた『現代襍樓集』（『折口信夫全集』第三三卷）の詩がそれです。折口は、詩の別れを経験しなかった点でも、（ずっと後で詩とめぐりあった、といった方がよいでしょう。）師の柳田とはちがっています。柳田国男と詩の

関係は、いったいどういふふうになっていたのでしょうか。

柳田国男がまだ健在だった最晩年に、かれの全著作を網羅する全集の企てが起きました。筑摩書房が出版を担当し、主だった門弟によって編集委員会が構成されるにあたり、柳田は、いくつかの条件を出した、と聞いています。第一に、自分の新体詩の作品はいつさい採録しないこと。第二に、農政学の関係も主要な著作にとどめること。第三に、日記の類は、自分が印行する意義があると考えるもの以外は入れず、他の断簡零墨のたぐいも拾い集めないこと。第四に、自分の手で文章として書き直したものを以外は、講演・談話筆記を加えないこと。そのため、筑摩書房は、全集と銘打ったものの刊行を断念せざるをえなくなりました。『柳田国男集』という名称にきまりましたが、出版社のたっての希望で、小文字で「定本」と角書^{かき}することが許され、『定本柳田国男集』が、在世最後の年に出はじめ、没後にわたって、三二巻、別巻五巻、計三六巻が完成いたしました（一九七一年五月）。

民俗学以前の柳田の仕事のうち、農政学の面に関しては、柳田のなくなつた一九六二年の末（柳田がなくなつたのは八月です。）に発表された谷沢永一の『時代ト農政』前後（『国語と国文学』一二月号、のちに同氏『近代日本文学史の構想』に収載。）が、柳田の農政学の意義の再発掘を提唱し、刊行途中の『定本柳田国男集』が農政学の業績を多く収録しないことを嘆く、ということがありました。その影響で編集委員会が当初の計画よりも相当部分を増補しました。その後、それにも洩れたものを、藤井隆至^{たかし}編の『柳田国男 農政論集』（一九七五年）が集める、ということがありました。しかし、それ

もまだ少し拾い残しがあり、完全網羅ではありませんが、ほぼ、この本と『定本』で接することができます。

新体詩の方はどうかと申しますと、生存中の一九五五年の『現代日本文学全集』の『柳田国男集』でも、『定本』の段階でも、「先生の御意志が固かった」ということで、いっさいネグレクトされました。それ以後も、柳田の著作権に関する業務を托されていた、定本編集委員会の代表大藤時彦^{おとこ}氏は、柳田の著作の刊行に新体詩を加えることは認めませんでした。

ただし、柳田生前にあつても、こういうケースがありました。一九五〇年に刊行の『日本現代詩大系』第二巻は、一八九七年（明治三〇）の『抒情詩』（国木田独歩・松岡国男・田山花袋・太田玉茗・矢崎嵯峨^{さやま}廼舎・宮崎湖処子の六人の詩集）の全文と一八九八年（明治三一）の十二人の合同詩集『山高水長』の抄を収めています。十二人というのは、国木田哲夫（こちらは独歩の号になっていません）・田山花袋・宮崎湖処子・佐々木信綱・石橋愚仙・松岡国男・繁野天来・正岡子規・大町桂月・太田玉茗・重松朋水・桐生悠々であります。この『山高水長』のセレクションには、松岡国男作は五篇入っています。この『日本現代詩大系』の場合、他の多くの人びととの合同詩集の複刻で、集中の自作についてだけ拒絶することはしにくい、と考えられたものではないか、と思われま

柳田没後二年の一九六四年（昭和三九）に、「近代文芸複製叢刊」として、『抒情詩』が全容を往時のままのものに複製刊行されました（いま御覧願っているものです）。一九七二年（昭和四七）の『明治文学全集』の『明治詩人集（一）』にも、『抒情詩』全文が採録されて

います。ですから、『抒情詩』中の松岡国男の「野辺のゆき」の三〇篇と、『日本現代詩大系』中の『山高水長』の五篇とが、戦後活字化されていました。

なぜ本人の意向に背いて、新体詩をふたたび取り上げようとしたのか

『定本柳田国男集』を完成した筑摩書房は、一九七八年（昭和五三）から、『新編柳田国男集』の一五巻の、『定本』の普及版ともいふべきものを刊行しました。この時点では、『定本』の編集委員会はずでに解散しており、前回より自由に出版社側の意図も盛り込んだものを、という方向でありました。これは、編集部員の村上彩子さんが担当しましたが、村上さんはこの大学の小田切ゼミの出身で、わたくしも教えたことのある女性です。当時、わたくしは筑摩書房の顧問でありましたので、村上さんとこの企画について相談する役になりました。わたくしは、この時、『定本』にはなかったことを二つ実現しようと企てました。一つは、柳田が生前ほとんど形を造っていながら、単行書になっていなかった、自伝的回想「ささやかなる昔」を、単行書として一本の形を与えるということです。談話録『故郷七十年』と並ぶものとして、多くの人びとに読んでほしいと思いました。これは、生前独立した本になっていなかったから、というので筑摩が二の足を踏み、実現しませんでした。社、倒産再建後に、筑摩叢書の一冊として刊行されました。ただし、わたくしは、倒産の時顧問を辞しておりますので、その間の事情は知りません。これは、『定本』で他のものといっしょになっているの

を、独立の一本にするかどうかですから、大したことはありません。わたくしは、眼の先を変えたかっただけでした。

第二のこの時のもくろみは、『新編柳田国男集』の第一巻に、松岡国男時代の新体詩を収載することです。なぜ、敢えてそうしたいのかは、後で申しますが、出版の実務的なことを先に立てて、その方からお話したいと思います。従来、柳田国男の個人的著作として彼の新体詩の再刊を企てても、著作権者の許諾はえられない、と考えられていましたが、その頃、わたくしは、事情が変わりつつあるように感じはじめておりました。この少しまえに、柳田の全著作権の管理が定本編集委員会から柳田家へ戻りました。柳田家は、嗣子為正氏とその姉妹たる柳田国男の三人の令嬢の間で、その実際の処理法についての話し合いが煎つまらず、出版許諾は一時全面的に延期する時期がありました。その後、新しい方針が決まって動きはじめたのです。印税は四人の令息令嬢で均分されますが、出版の許諾は為正氏から出す。そういう情勢の内部変化で、「先生の御意志」に対する見方の違い、ある種の雪融けの徴候が出てきはじめて柳田国男のもの六、七冊を加えることになり、わたくしと神島二郎氏とその企画にあたり、それを推進するなかで、なんとなくそういう感触をえていたのです。実際の処理は為正氏夫人がされますが、夫人は、柳田門弟たちの間のこみいった諸事情、仕事をめぐる微妙な張り合いのつきあいに、やや気疲れしてもおられたようです。「先生の御意志」の墨守よりも、新しい時代の求める柳田国男探求にそれなりに対応していく、客観的態度に傾いてこられたよ

うに、間接的に感じました。わたくしたち柳田門以外の者が柳田の著作の解説・解題をすることに対しても、好意的でありました。

『新編柳田国男集』の第一巻『野辺のゆき、野辺の小草・後狩詞記・遠野物語・山の人生』という一冊（一九七八年四月）は、こうして、わたくしの予測どおりに、それまでタブー視されていたものを突き破って、柳田の新体詩を収めた個人著作として、はじめて世に出ました。解説は、当時、柳田の青春期の文学活動について新鮮な評論を書きはじめられていた、岡谷公二氏にお願いしました。わたくしは、自ら希望して、第三巻の『青年と学問・日本農民史』の解説を担当しました。

この『新編柳田国男集』の第一巻には、六人の詩集『抒情詩』中の松岡国男の「野辺のゆき、」三〇篇全部と、十二人の詩集『山高水長』中の松岡国男の「野辺の小草」十八篇全部を採りました。それは、詩の数では、一九一六年（大正五）に水野葉舟が編んだ『心の響―列伝体的新体詩集―』に収録の、柳田作品の数と同じです。ただし、それは、『山高水長』所収のものを、『抒情詩』所収のものより前に出し、その順序も、原詩集とごく少し違っています。ですから、単行書に収められた柳田の新体詩としては、『心の響』と『新編柳田国男集』収録の四八篇が、最も多いことになります。このほかに『帝国文学』などの雑誌掲載のままバラバラにあるものが、二〇篇近くあります。いつか、柳田国男の全詩集を編んでおく必要があります。なお根強く残っている「先生の御意志」の幻影とたたかって。

その必要がなぜあるのか、ということは、水野葉舟が、同時代人

の同じ文学者として、明治の新体詩史の初期をふりかえって、『心の響』で松岡国男という詩人を紹介しているところに、過不足なく述べられています。水野の「列伝体的新体詩集」というサブ・タイトルの詩史が、なぜ彼の作品の再評価に力瘤を入れたか、それは、プリントの方に写しておきました、水野の文章によって明かでしょう。水野のこの見方は、その後の、蒲原有明や日夏耿之介などの、近代詩史上の柳田の座標点の見定めを導き出したもの、ともいってよい文章です。水野葉舟は、あの『遠野物語』の語り手佐々木鏡石（喜善）を、牛込の柳田の家へ連れていった人でもあります。『心の響』でこういっています。長文ですが、重要だと思えますので、そのまま読みあげます。まず、『心の響』の序のなかからです。

かうして編纂して見ると日本の詩は、いろ／＼な変転をして来たが、その本来の力を含んで来たのは、極めて近來のことであるのが明かになった。初めは言葉の数を合せて作ったたゞごとのものであったのが、松岡国男氏に依つて、人間の情緒のものになり、島崎氏に依つてそれらが更らに複雑なものとして現れた。これが曙の光である。

ついで北原氏に依つて肉体の感触から見る美しい世界が表され、三木氏に依つて響となり、更らに高村氏に依つて人間の全身のものとならうとして来てゐる。

多くの人の夫々の生活が表れてゐるのを見ると、その時その時に生きて居た人が歩んだ道がよく解る。それがどの位、詩に対する多量の証言となるものであるか解らない。

私はこの人間の過去の事実によつて千万言の言葉を聞く心持がする。

水野の『心の響』は、第一から第三まで三部仕立てになつてゐる詩集ですが、内容としては、次の人びとの作品を掲げています。

第一 新声社同人 北村透谷 大町桂月 塩井雨江 武島羽衣

松岡国男 田山花袋 太田玉茗 国木田独歩 宮崎湖処子 繁

野天来 三木天遊

第二 島崎藤村 土井晩翠 蒲田泣菫 蒲原有明 与謝野鉄幹

岩野泡鳴 平木白星 児玉花外 河井醉茗 横瀬夜雨 伊良子

清白 小山内薫 窪田空穂

第三 上田敏 森鷗外 北原白秋 三木露風 平野万里 永井荷

風 木下杢太郎 与謝野晶子 加藤介春 三富朽葉 福士幸二

郎 水野盈太郎 高村光太郎 左近義弼氏新訳の「詩篇」(ゴ

チック、益田)

この三部仕立ては、一九一六年当時の水野葉舟のイメージしてゐた新体詩史の三段階をあらわしているようですが、第一期から松岡国男、第二期から島崎藤村、第三期から北原白秋、三木露風、高村光太郎をあげて、自分たちの時代に至るまでの詩史のピークをたどつて、詩史のアウトラインを述べたのが、いま読み上げました序の一部であります。(第三期に作品を掲げてある水野盈太郎が、葉舟自身でもあります。)新体詩史、いかえれば近代詩史の創始期のピークとして、『新体詩抄』のだれかれでなく、柳田国男を挙げたのはなぜか。同じ『心の響』の第一の松岡国男の作品のまゝに付した、特に長文の紹介解説の文章で、そのことが、さらに詳しく述べられてい

ます。

島崎藤村氏が第一に詩壇の權威として世間に迎へられた前、松岡国男、その他二三の匿名で詩を書いた人(ママ)が、今の柳田国男氏がある。今は日本民族学(ママ)の研究について誠実な学者として知られてゐる。

柳田氏の詩については、現在の人は殆ど知らないと思はれる。だが当時にあつて、この人は島崎藤村氏の生む原因になつた重んずべき一人である。のみならず当時の詩壇に真に「人の声」を發した初めの一人であつた。当時この人達の詩は一体に殆ど情緒を歌つたものばかりと言つてもいい位であつた。

だが単純でありながら直接に自分のからだから涌く感情に従つて、その詩を作つた人達であつた(読点ナシ、ママ)それが今になつて見ても、他のいかめしい計画をした詩よりもずっと勝れて居るのを感じる。人間の残して置いたものの中で、値のあるものは、やはりその人の生命が直接に声を出したものである事が思はれる。その中にはその人の生きた肉体の力が、生き残つて居てそれを吾々に感じさせるのである。

柳田氏と前後して詩を書いた人の中で、国木田独歩、田山花袋、太田玉茗、宮崎湖処子などの人々があつた。これはこの人々(ママ)はそれぞれの特質があるが、等しく自分の感情を直接に言葉にしよ(ママ)うとした人である。

この人々に対峙して、作を公にしたのは三木天遊繁野天来の二氏である。島崎藤村氏もこの人々と同時に作品を公にして居たが、その若菜集が公にされてから時代を画してしまつた。

この以前の時代は、明治詩界の混沌時代から漸く白明の見えて来た時と考へられる。

それでこの時代の詩人で、一番すぐれて居た人は柳田国男氏であつたと思ふ。この人は後にその詩作を断つて、その専攻の学問に専心し、政府の官吏となつたので、その詩が後の時代にいろ／＼な影況を与へなかつたし、作品も比較的少かつた。

氏の作品は今殆ど世間に出て居ないと思ふから、この集には出来るだけの数を入れた。独歩、花袋、玉茗、湖処子と五人合著の詩集「抒情詩」と言ふのがあるが、今は殆ど何処にもない。後に「山高水長」と言ふ詩集が出た事があつて、その中に柳田氏の詩が収められて居るのを見たが、それを今度は大抵集めた。読者はこの人の詩に深い注意を寄せられんことを希望する。

この時代は、日本の詩の發生の第一期であつたので甚しく雑然として居た。その中でもかく直接に自己の感情を歌はうとしたこの人々の表れたのは、幼稚であつた詩界に初めて人間の力が表されたのである。その上この人々は当時の一般に対して余程聡明であつたと思はれる。それから以後日本の詩はその發生期の有様がいろ／＼に変転して居ながら、現在までも続いてゐる。「詩」といふ不思議な、あまいな偶像的の觀念が、後にそのいろ／＼と變転して行きながら、日本の詩界を支配して居た。それがわづかに破れて来ようとしたのは、ずっと近來の事である。

今、柳田氏の詩全体の素性について詳しく述べる事は出来ないが、この短い抒情詩と、他に私の記憶して居る処で考へて見ると、氏の作品は、やさしい、純粹な情緒の旋律である。柔軟のや

うで鋭く、静かで悲しく、感傷し易い心で秋の空のやうに澄み切つて美しく、聡明である。その情緒は当時の他の人に比べるとはるかに豊麗で、すぐれてデリケートである。その質が全く異つた処から生れて来た作品である。

今から考へて見ると、この種の感情が狭く、弱いものであるとは思はれるが、しかしかういふ種類のものとしては、やはり立派なものであることを感じる。

水野葉舟のこの文章は、史的な目くばりのよく利いた、しかも、同時代の後を追つて進んだ詩人としての主体的な把握のしかたも生かした、すぐれた的確な批評・評価を内蔵しているものだ、とわたしは感心して受けとめていますが、この文章が世に出たのは一九一六年（大正五）で、『抒情詩』の一九一七年（明治三〇）、『山高水長』の一九一八年（明治三一）は、十七、八年前に過ぎません。その間に、詩の歴史も急展開を見せていたのです。『抒情詩』が出た一九一七年四月、柳田は二二歳、第一高等学校の生徒で、最上級におりました。『山高水長』が出た一九一八年一月には、二四歳、東京帝大法科大学の学生で、病気で大学を休んでおりました。柳田の詩は、翌年一九一九年を最後にどの文学雑誌にも見られなくなりました。まだ大学生のうちです。

水野葉舟が編んだ『心の響』が世に出た一九一六年（大正五）九月の時点では、柳田の方は、数えで四二歳、貴族院書記官長、いまの参議院事務総長にあたる職にありました。

柳田国男の詩は、島崎藤村の『若菜集』という近代詩史のメルクマール出現以前をふりかえってみようとするとき、創作者本人がす

でに詩作から離れていつていても、新体詩の最初のことばの表現としての成熟を示したものととして、わたくしたちが忘れるべきでないことは、水野の指摘どうりでありましょう。「この人は島崎藤村氏の生む原因になつた重んずべき一人である」といつていますのは、「島崎藤村を生む原因になつた」の誤植ですが、松岡国男の詩の表現が、いかに同時代の新体詩の表現の水準から抽んでおり、藤村への直接的な強烈な刺激、ないし触媒となつたか、をいつていると思ひます。ほんとうならば、同時期の詩人たちの作品と具体的に比較して、水野の見方が妥当であることを裏付けて進んだ方がよいのですが、いまはそれを略します。時間が足りません。同時代の詩人水野葉舟の証言だけでも、近代詩の一段階として、松岡国男の詩を忘却すべきかどうか、は問題たりうるように思ひます。プリントに、作品のごく一部を掲げましたので、読みあげてみます。最初の方は、『抒情詩』に載せた「野辺のゆき」のなかから抜いた数篇です。

夕ぐれに眠のさめし時

うたて此世はをぐらきを
何しにわれはさめつらむ、
いざ今いち度かへらばや、
うつくしかりし夢の世に、

当時の多くの新体詩と共通の七・五調四行詩のかたちですが、表

現そのものは同時代の詩一般から遙かに抽んでいるように思ひます。西洋からきた八詩Vが、ここにきてようやく八日本のことばVのこなれた醇美な表現とめぐりあつた、といえましょう。

美しき姫に若者がいひし

君がむかしの人に我が
似たりといふはまことにや、
それかあらぬか一目見て
早よそならず思ひてし、

君がかたるを聞きつれば
昔ぞ見ゆるおもかげに、
我やそれかとまどふまで
すゞろ其世のしのばれて、

此もさるべき世なりけん、
さればぞ夢に見えつるも
身にしむばかり覚えしも
こゝろのみにはあらざりし、

似たりといふは実まことにや、
うれしやさらば君も亦
我をあはれとおぼすべし、

むかしの事を思ひ出で、
ものいひたまへ清き君、
などさは沈みおはすらん、
いかゞはすべき我が胸の
苦しきまでにとどろくを、

園の清水

その、清水を汲み上げて
かきねの花にかけつれば
さながら露となりけり、
君がこゝろをくみとりて
あはれといひし言の葉ぞ
つひに恋とはなりにける、

母なき君

は、なき君をあはれとて
泣きつる我もつひに亦
母なき人となりけり、
あはれと君はおぼすべし、

今よりのちは露の身の
かなしくつらくある毎に、
かたるも聞くも君ならで
誰かはあらん、広き世に、

野の家

袖子が家のやねの草、
そで子がやねの草の露、
ゆふべは宿る星ひとつ、
あはれその星なつかしや、
空のゆふべになる毎に
きよき姿を思ひかね
うれしき星をまた見むと
野みちを来れば野の末に、

うき世のわざぞすべきもなき、
さしも恋しき野の家を
雲のあなたに別れ来て
みやこの市を我が行けば
漲る^{みなぎ}ちりのひまとめて
むかしの星ぞ見ゆるなる、

星よみやこは楽しきか、
ゆふぐれきよきかの人も
見えぬ都はたのしきか、

『新体山高水長』に収められた「野辺の小草」からも、幾篇か読
んでみます。

あこようたへ

あこよいざとくかの歌を
あねが教へしかのうたを
高くうたひてまぎらはせ
このたへがたき夕やみを

かき根をめぐる水のおと
わら家訪ひ来るほしの影
すぎにし事のかぎりなく
思ひ出さるゝ夜なりけり

我がめづる子に物やらん
かなしき声をひそめつゝ
姉きみ来ずやと問ふな夢
たゞとく歌へかのうたを

夕づゝ

かのたそがれの国にこそ
こひしき皆はいますなれ
うしと此世を見るならば
我をいざなへゆふづゝよ

やつれはてたる孤児みなしごを

あはれむ母がことの葉を
しづけき空より通ひ来て
われにつたへよ夕かぜよ

春の夜

をぎつねきつね春の夜を
せめてはなくな故ゆゑさとの
わら家の鳩がたまさかに
むかしの我を思ひ出でゝ
夢に見にこんおぼろ夜を

野の家

あしびきの山のあらゝぎ、
たゞ一もと摘みてもて来て

我妹子がたもとに入れし
あしびきのやまの蘭あしびき
いまもなほさやかに匂ふ、
あなうれし我をばいまだ
忘れたまはじ、

○（無題）

わが恋やむはいつならむ、
雨よりしげき涙もて
君がたもとをぬらしつゝ、
いはぬ四年の苦しさを
唯ひと度にうちあけて
あはれと君も泣かんととき、
我が恋やむは何時ならむ、
いのちをかけてわが悪むにく
かたきよ、君をいざなひて
あなたの国に行くを見て
今はとひとりしづかにも
をぐらき淵に入らむ時、

わが恋やむはいつならむ、
泣きて入りにしわが墓に

春はすみれの花咲かば
みち行く君がおのづから
摘みてかざゝむ其日こそ
陰なる我はまた泣かめ、

これらの詩は、すべて七・五調です。四行の短いもの、一連四行をいくつか重ねていくもの、一連三行とか一連五行、あるいは六行にして変化を企てたものと、少しの変化はありますが、七・五調に閉じこもっている点に変わりはありません。藤村の「初恋」も、「マダアゲソメシ マエガミノ」と七・五調四行の組み立てでしたが、彼は、「千曲川旅情の歌」の「コモロナル コジョウウノホトリ」の五・七調六行詩や、「椰子の実」の「ナモシラヌ トオキシマヨリ」の五・七調二行詩など、詩型をしいにひろげ、さまざまに変化させるくふうをしていきました。藤村に強い刺激を与え、その流麗な詩のことばの誕生に影響を及ぼした柳田の方は、それ以前に詩と別れてしまいました。藤村の詩業によって、柳田の詩の新しい光がたちまち褪せてしまったのは、無理がない点があります。しかし、新体詩初期の表現の生硬さを、最初に乗り越えたのはだれか、ということに残るはずだと考えます。

詩の別れの原因をどう考えるか

柳田国男が詩作から離れていった当時のことを、はやくから柳田と同じ松浦菽坪のもとで和歌をともに学び、同じように新体詩運動に入っていた田山花袋は、柳田をモデルにした小説『妻』の主人

公にこう言わせるかたちで、描いています。

「僕はもう詩などに満足して居られない。これから實際社会に入るんだ。戦ふだけは戦ふのだ」

また、

「……僕は文学が目的ではない。僕の詩はディレクタンティズムだった。もう僕は覚めた。恋歌を作って何になる！ その暇があるなら農政学を一頁でも読む方が好い」

とも。花袋がそういう柳田のことを耳にしたことは、多分あったでしょう。しかし、大学を卒業し、農商務省に入って実務につき、大審院判事柳田直平の養嗣子にもなって、身上に大きな変動が生じたことは確かでも、それは、柳田が文学を捨てて農政学へ走り、官僚生活に没入していったことを意味しませんでした。

柳田は文学を捨てておりません。詩こそ作らなくなったものの、柳田の文学活動はますます旺盛になりました。はやく相馬庸郎の「柳田国男―主体形成期の探究―」（『解釈と鑑賞』一九六〇年一〇月）や、「柳田民俗学の方法」（『文学』一九六一年一月）（いずれものちに同氏『日本自然主義論』に収録。）がくわしく言及しているように、田山花袋・小栗風葉・川上眉山・蒲原有明・生田葵山などを集めての、たびたびの文学研究の会を主宰し、文壇の一リーダーとして、むしろ一層活発に活動しはじめています。それは、一九一〇年（明治四三）のころまで、イプセン会や竜土会というかたちでつづいていきます。

ついでにいえば、この一九一〇年というのは、柳田が法政大学で農政学を講じはじめた年でもあります。もうひとつ、余分のことに

なるかもしれませんが、柳田のはやいころの文学活動を調べた相馬さんは、いまは神戸大学文学部教授ですが、戦時中海軍機関学校生徒で、戦後、法政大学の通信教育課程で日本文学を学び、都立大学の大学院へ進まれました。そして、成城大学に柳田さんの蔵書が移され柳田文庫となったころ、その文庫の整理の仕事をしていて、柳田さんともよく出会っており、それが研究という形にも結びついていったのでした。

それはそれとして、柳田の詩との別れは、文学を断念して実学へ転じた、という簡単な図式ではとらえられません。岡谷公二の『新編柳田国男集』第一巻の解説は、

明治三十一年に入ってから、次第に詩作への意欲がうすれ、作品の量も少なくなり、その詩から、かつて人々を魅惑した清新な抒情の聲が失われてゆく。このような詩心の衰えの背景として、圧倒的な人気を得た藤村の『若菜集』の出版（三十年八月）、雑誌『文学界』の廃刊（三十一年一月）、ある種の恋愛事件の終末、大学で松崎蔵之助について学びはじめた農政学への専念などを考えることができる。

と四つのファクターの複合で、柳田の詩の別れを解明しています。外在的な事象で分析していけば、そういうふうに見えるほかないでしょう。だが、それらの事態を、柳田の詩に対するどういう意識の変化が迎えとり、そこで生じたものが、柳田のそれらの行動を導き出したのか、問題を内在的にもとらえる必要があるように思います。

柳田が新体詩と別れたことと、それ以後ますます熱心にヨーロッパの小説や戯曲に近づき親しみながらも、わが国の自然主義文学の

潮流の到来にぶつかり、自分の培ってきた文学観との大きな乖離を痛感して、文学運動の中心の座から退いていったことは、別のこととして、あくまで二段階に考えるべきだろう、と思います。

文学の新旧の潮ざかに身を置いて、自分の本質が、表面的な新しさと実は違って、古い方にあり、それはもうどうしようもない価値のないものだ、と自己判定する——時の動きに鋭敏すぎる感じ方が柳田にあり、この二段階の文学との別れは、どちらもそのこととかわっているように考えていますが、前の方、詩の別れに関しては、柳田自身の言に耳を傾ける必要もあり、岡谷さんの考察には、それが脱けた形になっています。

柳田の最晩年の生涯の回想『故郷七十年』という談話録で、柳田はこう語りました。

宮崎湖処子の「帰省」といふ心持にしても、そのころの学生がなんとなくこれに共鳴するのあまり、一種の概念にしてしまった感がある。歌でもさうで、すべて一般の定義みたいなものを形づくってしまった。それが日清戦争ごろまでの思想になつてゐた。私らも要するにその奴隷のやうなもので、そのやうな考への追隨者であつた。

これは、湖処子の「帰省」が古いといっているのではない。その新しい表現をすぐ型に化してしまい、型に自らをはめこむ当時の受けとり方を古いというのです。自分も、そういう型にはめて自己をとらえる側の人間でしかなかった、という告白です。

今日のやうに実験したものを直ぐに書くといふ文学は、明治三十年以後に盛んになつたのではないかと思ふ。湖処子あたりがそ

の境目になり。誇張はしても、空想でなく、事実あつたことを誇張したものであつた、私どもの「野辺のゆき」なども全部これであつた。題詠の習慣があつたので、新体詩も大体そのやうに考へられ、恋愛を若い者が詠むのが普通だといふことになり、恋愛ならばおおよそ湖処子の「帰省」みたいなものか、さうでなければ往來の行きずりの話とか大体題材がきまつてゐた。後年の人がそれを読み返すとき、当時の風潮といふことを考へて、それだけの用意と理解をもつて読んでもらひたいと思つてゐる。

さらに、こうも語っています。

歌や文学のもつ両面を私は身をもつて経験させられたと思つてゐる。すなはち一つはいはゆるロマンチックなフィクションで、自分で空想して何の恋の歌でも詠めるといふやうな側と、もう一つ、自分の経験したことではなければ詠めない。あるいはありのままのことを書く真摯が文学だといふ近ごろの人々のいふやうな側との二つで、この対立を私はかなりはつきりと経験させられた。

私などの作つた新体詩はその前者の方であつた。やつと二十そこゝの若い者にさうたくさん経験がある氣遣ひはない。それでゐて歌はみな痛烈な恋愛を詠じてゐるのだから、後になつて子孫に誤解せられたりすると、かなり困ることになる。もちろんこの当時の新体詩にも二つの方向があつた。一つは西洋の詩の影響を受けたもの、もう一つは私のやうに短歌からきた題詠の稽古と同じ方法をとるものであつた。

この柳田のいう新体詩人の二つの方向を、島崎藤村と松岡国男という実在人物の名であらわしてもよいでしょう。英文学などの外国

文学で育ってきた人間が同時代にいる。しかし、柳田のように、短歌革新による近代短歌出現以前の、旧派の短歌で自己を鍛えてきた人間もいる。松岡国男の新体詩が、それまでの『新体詩抄』以来の生硬なことばの表現を脱し、新境地へ出てきた理由は、主として、旧派短歌できたえた表現力に負うところが大きい、ということができます。誰れよりも鋭敏に、文学の潮流が変わっていくことを悟った柳田は、その表現力よりも、もっと重大な発想の方が、旧派短歌の題詠ふうではいけないことを自覚したのでしょう。外面新しく見えても、自分の詩は方法的に旧いのだ、このさき新生面をきりひらきつつけることは可能ではなからう。新旧文学の間に挟まれて、自分の旧派的体質にひそかに気づいたとき、詩人松岡国男は自らを葬るほかなかったのでしょうか。

岡谷さんの挙げた四つのファクターは、どれも打ち消す必要のないものでしょう。しかし、それがそれとして実際に効力を発揮する内側には、自分の文学的発想力の旧いことに思っている、という深刻なことがらが潜んでいるようです。文学の時代的な変りめに身を置いて、自分が新旧の旧の側に生きてきたことを、うら若い彼が認識するにいたる、という酷烈な事実。自ら落伍する先進的な詩人の内面状況は、それ自体が明治三十年前後の歴史そのものをあらわしております。

ところで、そのことと、柳田が新体詩人としての自作を全面的に否定し、著作集に入れないようにはかった、ということとは必ずしも直結して考ええないかもしれません。それにはどうしても、柳田最晩年の独特の問題が考慮されなければならぬでしょう。

それは、わたくしには、最晩年の柳田国男の苦悩と深く結びついていようように思われます。石田英一郎の、日本民俗学は文化人類学のなかに解体吸収すべし、という文化人類学の側からの提唱とかかわった問題でありましょう。日本民俗学の独自性を理論的にも明確にする努力を、民俗学研究所員に要求するのが、一九五五年（昭和三〇）二月、自ら日本民俗学の将来に残された問題を、所員に開陳したのが、その八月。現在の民俗学の側に文化人類学に理論的に對抗する力なし、と判断して、民俗学研究所の閉鎖を提案したのが、その一二月。柳田、八一歳の年でした。研究所の解散手続が終わったのは、一九五七年の八月です。八三歳でした。驚くべきことには、八六歳の一九六〇年五月に、千葉市で、「日本民俗学の頹廢を悲しむ」という講演をしています。『定本柳田国男集』の出版企画がきまったのは、翌一九六一年、八七歳。逝去の前年です。自分の門下生たちによる日本民俗学の体系樹立と新しい理論的展開に絶望しながら、柳田は、自分の半生をかけて打ち出したものだけで、民俗学とはなにか、を後世にはっきり示すほかなくあります。民俗学者としての柳田国男像を確立するには、農政学者としての自分も、ある部分は邪魔になります。ましてジレットアント柳田、文学者柳田の仕事の一部分が日本民俗学であってはなりません。自己の多くをここで抹殺し、民俗学のイメージを確かなものにして死んでいこう、とする柳田の企てが、二度目の詩の別れ、新体詩人としての自己忌避になった、とわたくしは考えます。なんとも悲壯な最晩年の自己選択とさえ感じるのです。

（文学部教授）